

みんなで作る学校

10月11日より後期がスタートしました。「志免中央小だより」の10月号に載せている通り、この日に中央っ子がめざしたい姿についてお話をしました。達成するためには2つ方法があると本校では考えており、一つは地域や保護者の皆様と一緒に活動し、自分の考えをつくる、自分と友達を大切にするカリキュラムをつくっていくこと、もう一つは「みんなが大事にしたいこと(きまり)」について子供たちが自分の目標を立て、やってみて振り返るというサイクルをつくることです。9月以降、校外で学ぶことが増えた子供たちは、教科の学習に関する学びだけでなく、集団での自分の役割の自覚、思いやりの心を持った行動において学びを深めようとしています。丸付けボランティアは、来月以降もございますので、ぜひ、参加していただきお子様や友達との様子をご覧ください。



共生社会をつくるには、どのような働きかけが必要か、地域の方と一緒に考えました。



保護者に丸付けしてもらった子供は笑顔になり、急いで自分の机に戻ってチャレンジします。

本の魅力

9月下旬で、一人の平均貸出冊数は48冊です。年間100冊をめざしているので、多くの子供が達成できそうな勢いです。子供が読書している様子を見ますと、休み時間や授業と授業の間のすきま時間などに読んでいるようです。図書室にも多くの子供が訪れています。そもそも「本の魅力」とは何でしょうか。

一つは、「新しい世界との出会い」です。本は、自分の知らないことを登場人物や出来事を通して教えてくれます。また、多様な物について、細かな部分から分かりやすく説明されている図鑑などは、物の名前だけではなく、仕組みにも触れることができます。興味を持って読み重ねると、「〇〇博士」と友達から呼ばれるくらい物知りになるかもしれません。その意味で読書は、「新しい世界への扉」とも言えます。二つは、「自分の世界をつくれること」です。物語の場合、自分が登場人物の誰かになったかのように、本の世界に引き込まれることがあります。風景や音、匂いなどを細かく感じ取っているのかもしれません。

テレビやゲームと違い、物語などでは入ってくる情報が限られているため、感性がめまぐるしく働き、「自分なりに感じた本の世界」をつくり始めるのではないかと考えます。これが、読書の一番の魅力ではないでしょうか。子供たちには自分なりの感じ方で、「本の魅力」を味わってほしい、と思います。